平成 30 年度事業報告

平成 30 年度事業報告

人と自然の博物館では、平成 14 年度から「中期目標」と「措置」を設けています。中期目標はいわば博物館の行動の指針となる大項目であり、それぞれに達成を目指すべき目標値（指標）が設定されています。さらに中期目標各項目の下位項目として「措置」を設定し、博物館活動の活性化に資する取組を数値で把握するよう努めています。

- 第1期中期目標　平成 14 年度（2002 年度）～18 年度（2006 年度）
- 第2期中期目標　平成 19 年度（2007 年度）～24 年度（2012 年度）
  ＊開館 20 周年にあたって策定した「ひとはく将来ビジョン」を反映させるため期間を 1 年延長
- 第3期中期目標　平成 25 年度（2013 年度）～29 年度（2017 年度）
- 第4期中期目標　平成 30 年度（2018 年度）～令和 4 年度（2022 年度）

1 生涯学習支援

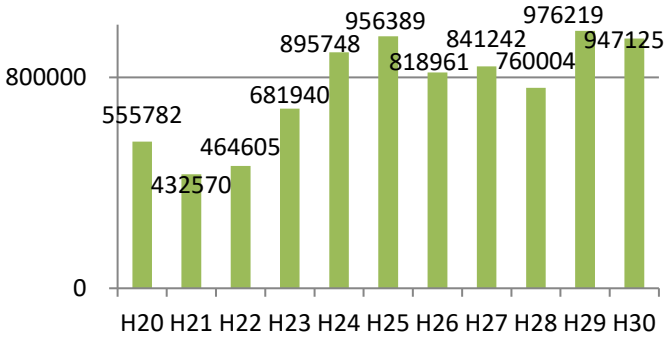
生涯学習課

「演示」手法を用いることで、あらゆる世代の知的好奇心を刺激し、多くの県民に「生涯を通じて学び続ける場」を提供します。

1 総利用者数

本館利用者数・連携施設利用者数・主催アウトリーチ事業・共催・協力事業の参加者数

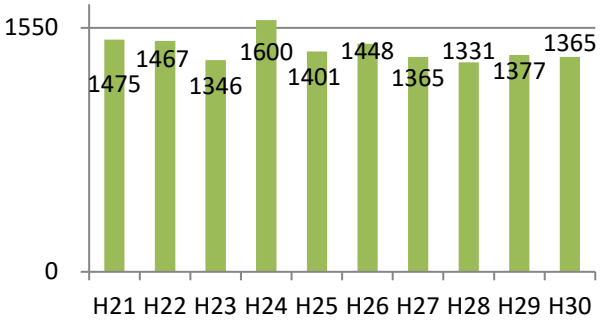
中 期 目 標: 800 千人/年
平成 30 年度:947 千人(118%)



2 生涯学習プログラム

館主催プログラム(一般セミナー+オープンセミナー+特注セミナー)の実施件数

中 期 目 標: 1,550 件/年
平成 30 年度:1,365 件(88%)



平成 30 年度の達成状況と自己評価

総ビジター数は 947 千人、前年度比 97%でした。このうち本館入館者は 162 千人、前年度比 102%、約 3 千人の増加になりました。平成 30 年度も県政 150 周年記念事業をはじめ、キャラバン・主催アウトリーチ事業を積極的に展開したことが要因であると考えられます。また、館主催プログラム数は、1365 件、前年度比 99%であり、今後もプログラム提供機会の更なる増加を目指します。

令和元年度の取組に向けて

令和元年度も引き続き、来館者の興味・関心を引き出す内容の企画展、セミナーを重点的に開催します。また、イベントスケジュールの配布や HP の更新など広報を積極的に行い、館主催プログラムなど博物館の魅力を積極的に発信します。キャラバン・主催アウトリーチ事業については、本物に触れる体験、探究するおもしろさを伝える内容や手法を工夫し、さらなる充実を図っていきます。

2 人材育成と活躍の場の整備

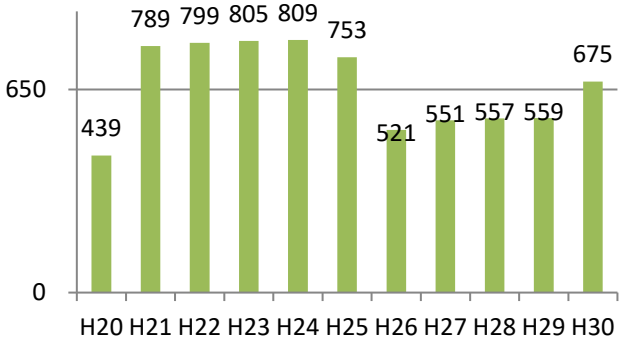
生涯学習
推進室

「担い手」の成長を支援し、活躍する「舞台」を提供します。

1 担い手の登録者数

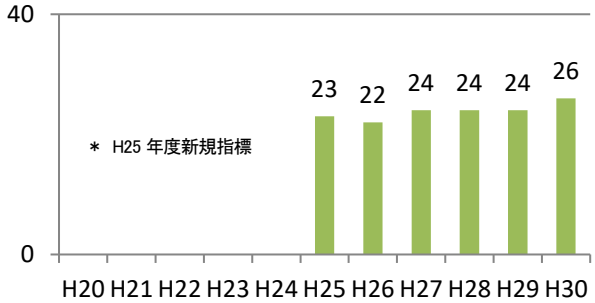
地域研究員、連携活動グループ、発掘・剖出ボランティアの登録者数

中 期 目 標 ： 650 人
平成 30 年度 ： 675 人(104%)



2 連携活動グループ登録団体数

中 期 目 標: 40 団体(R4 まで)
平成 30 年度: 26 人(65%)



平成 30 年度の達成状況と自己評価

今年度は昨年度と比べ、地域研究員が 9 名、連携活動グループが 2 団体 19 名増え、さらに 88 名の発掘・剖出ボランティアが新たに登録されました。地域研究員・連携活動グループ主催事業については、実施件数・実施日数・参加者数ともに中期目標値を上回り、活発な活動が行われています。第 14 回共生のひろばでは、口頭 8 件とポスター75 件の発表があり、市民研究者同士の活発な交流を通した担い手育成が行われました。

令和元年度の取組に向けて

これまで進めてきた取組を継続するとともに、さらなる地域研究員・連携活動グループの活躍の場づくりを通して、登録数の増加を促していきます。

3 連携・アウトリーチ活動

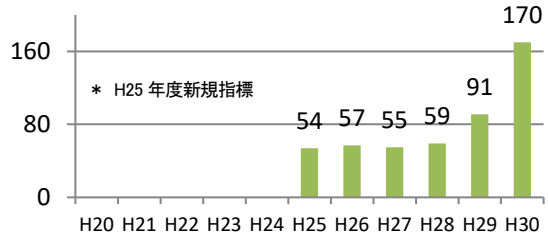
生涯学習推進室

多様な主体と連携し、全県的に事業を展開します。

1 アウトリーチ事業

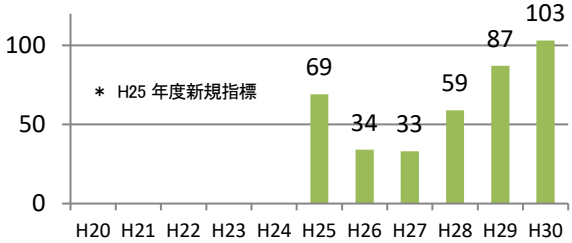
1-1. 主催アウトリーチ事業実施件数

中 期 目 標 ： 80 件/年
平成 30 年度 ： 170 件(213%)



1-2. ゆめはく稼働日数

中 期 目 標 ： 50 日/年
平成 30 年度：103 日(206%)

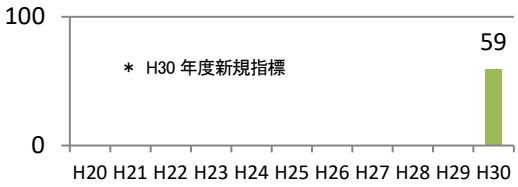


1 アウトリーチ事業

1-3. 地域展開度

県内の旧市町区数に対する主催アウトリーチ事業実施市町区数の比率

中 期 目 標 ： 100%(R4 まで)
平成 30 年度 ：59 件(59%)

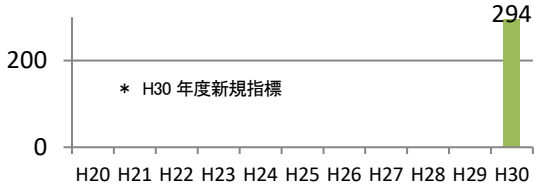


2 多様な主体との連携事業

2-1. 連携事業実施件数

主催アウトリーチ、主催・共催事業、協力事業、館内連携事業件数の合計

中 期 目 標: 200 件/年
平成 30 年度:294 件(147%)



平成 30 年度の達成状況と自己評価

主催アウトリーチ事業の実施件数は、中期目標の 2 倍を超す達成度となりました。これは、「風のほいくえん」など有馬富士公園での事業が 54 件あったほか、キッズキャラバンも昨年度より大幅に増えたことによります。今年度から取り入れた指標である地域展開度では、5カ年で県下すべての市町区でアウトリーチ事業を展開することを目標としていますが、初年度に当たる平成 30 年度で 59%の市町区で実施することができました。もうひとつの新たな指標である連携事業実施件数も、目標値を大きく上回りました。

令和元年度の取組に向けて

これまで力を入れてきた学校や幼稚園だけでなく、図書館や公園など幅広い主体と連携しながら、アウトリーチ活動を展開していきます。

4-1 研究活動

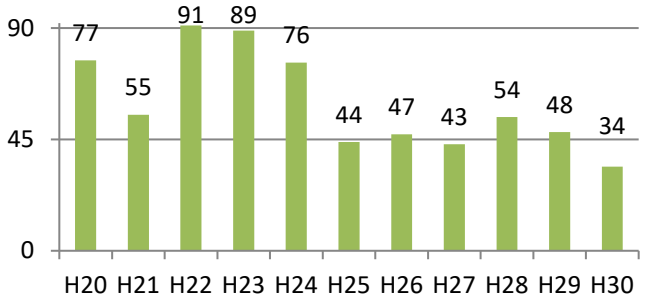
研究
シンクタンク
推進室

すべての活動の基礎となる研究を引き続き精力的に遂行し、成果を還元します。

1　学術論文･専門図書数

学会等の査読を経て掲載された学術論文と専門図書数

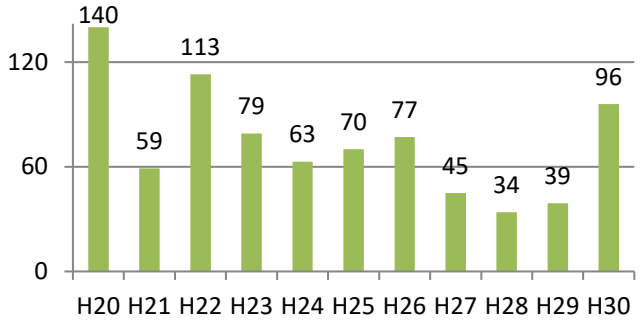
中 期 目 標 ： 45 本/年
平成 30 年度 ： 34 本(76%)



2　一般向け図書･その他著作数

一般向け図書、雑誌･新聞等の著作数

中 期 目 標 ： 60 本/年
平成 30 年度 ： 96 本(160%)



平成 30 年度の達成状況と自己評価

各指標とも今年度から目標値を高く設定しました。学術論文･専門図書数は昨年度までの目標値に近い成果が得られましたが、新たな目標値には届きませんでした。研究助成金獲得数･金額は目標を大きく上回っていることから、今後の成果発信が期待できます。一般向け著書等の数は、現在の情報環境を反映してHP等の電子媒体での成果を評価に入れた結果、これまで低調に推移していた目標値を大きく上回る成果を得ることができました。

令和元年度の取組に向けて

研究員セミナー等を通じて研究活動とその成果発信に対する研究員の意識向上を図ります。また博物館 HP や新聞媒体等を活用し、来館者にとってわかりやすい調査･研究に関連した読み物を提供するように努めます。

4-2 資　料

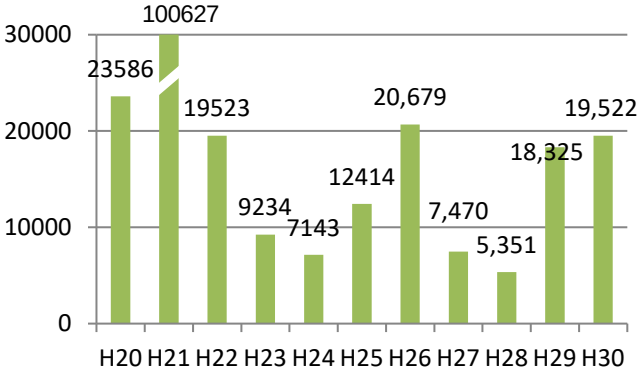
コレクション管理・活用室

特色ある質の高い資料を収集・整理し、利活用を推進します。

1　資料の登録点数

「ひとはく資料データベース」への年間登録件数

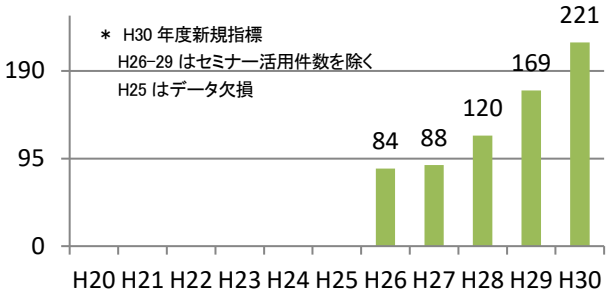
中 期 目 標 ： 10,000 点/年
平成 30 年度 ：19,522 点(195%)



2　資料の利活用点数

研究活用件数、貸出件数、館内・館外展示件数、セミナー活用件数(H30 新規項目)、マルチメディア等データ提供件数の合計

中 期 目 標 ： 95 件/年
平成 30 年度 ：221 件(233%)



平成 30 年度の達成状況と自己評価

博物館資料データベース登録件数、館外データベース(GBIF)への登録ともに順調で、目標を大幅に上回る成果を上げることができました。

令和元年度の取組に向けて

資料標本のデータベース化については、省力化のため標本画像データからのラベル情報自動読み取りとDB入力プログラムの開発を進めています。展示等への既存資料の活用は順調ですが、やや手薄になっている研究活動に生かす点について、論文の執筆・出版を中心にさらに推進します。

4-3 シンクタンク活動

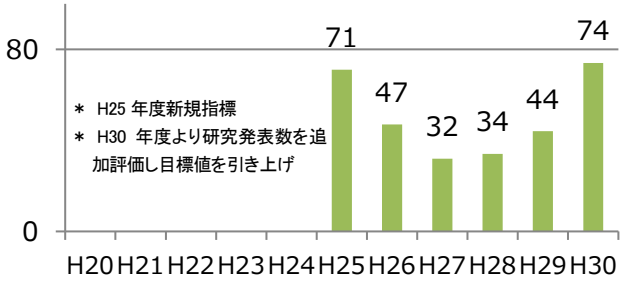
研究
シンクタンク
推進室

専門性を活かして地域づくりをリードします。

1　県政課題関連論文･著作･研究発表数

県内を対象とした学術論文、著作および研究発表の件数の合計

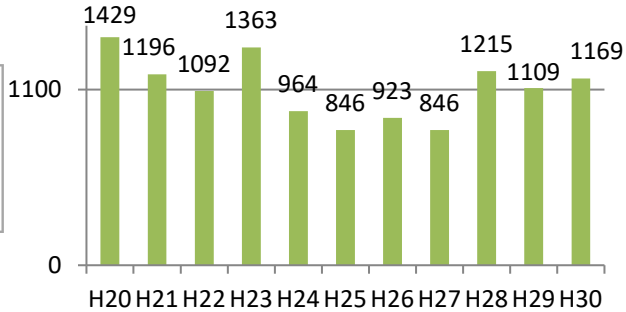
中 期 目 標 ： 80 件/年
平成 30 年度 ： 74 本(93%)



2　県政･市町行政に対する貢献度

国･県･市町関連の委員会参画数および相談件数の合計

中 期 目 標 ： 1,100 件/年
平成 30 年度 ：1,169 件(106%)



平成 30 年度の達成状況と自己評価

県政課題関連論文等の件数では研究発表数を評価し、目標値に近い成果を得られました。受託研究件数と県政･市町行政に対する貢献度のいずれも目標値を達成しており、シンクタンク活動は総じて順調に進められました。

令和元年度の取組に向けて

シンクタンク活動について近年はずっと数値目標を超える、あるいはそれに近い成果をあげていますが、貢献できている県内地域には偏りがあります。令和元年度以降には貢献が少ない地域を考慮し、広く県民に貢献できるシンクタンク活動を展開するよう努力します。

5 マーケティング・マネジメント

企画・調整室

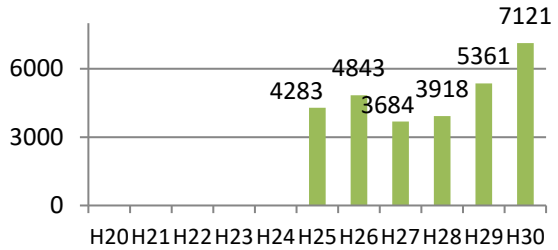
変化する社会状況に対応した効率的で健全な運営を行い、多くの県民に認知・利用される博物館を創出します。

1 外部資金による事業推進

1-1. 外部資金獲得金額

研究助成金、受託研究費、事業活動助成金の合計金額

中 期 目 標 ： 4000 万円
平成 30 年度 :7121 万円(178%)

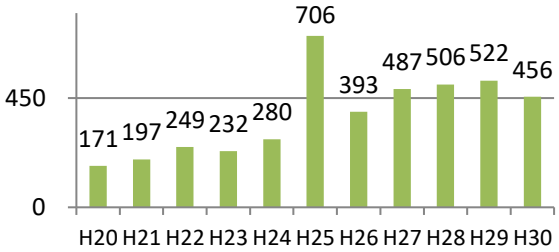


2 情報発信

2-1. H.P.アクセス件数

当館ホームページへのアクセス件数

中 期 目 標: 450 件/年
平成 30 年度: 456 件(101%)

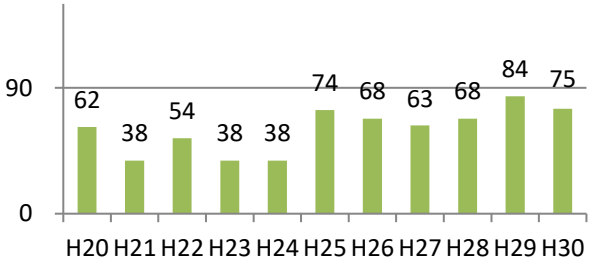


3 中期目標の達成度

当該指標以外の総指標数 16 に対する「達成率 90%以上の指標数」の比率

中 期 目 標 ： 90%
平成 30 年度 ： 75%(83%)

＊ H30 年度より各指標の達成基準を「達成率 80%以上」から引き上げ



平成 30 年度の達成状況と自己評価

外部資金の獲得金額と当館ホームページへのアクセス件数については目標を達成することができました。特に外部資金の獲得金額は前年度よりもかなり多く、目標値を大きく上回る結果となりました。この点は高く評価されるべきであると考えています。ホームページへのアクセス件数は博物館のイベントを中心に新着情報の掲載、親しみやすいブログ記事の更新など、情報発信に向けた日々の努力のたまものであり、この点も評価に値すると考えています。しかし、中期目標の達成度は目標値を大きく下回っていますので、全体的には今後のさらなる努力が必要であるといえます。

令和元年度の取組に向けて

令和元年度には新たな事業を複数実施する予定です。これらの事業を確実に推進することで中期目標の達成度の向上を図ります。また、既存事業の強化・拡充にも努めます。

タスクフォース事業

タスクフォース（組織群）について

従来の組織群とは別に、短期の課題を達成するために平成 20 年度からタスクフォース制度を導入しました。各タスクフォースはリーダー・サブリーダー・メンバーで構成し、課題の達成状況に応じて年度途中でも人員は変更可能です。また新たなタスクフォースを発足できるようにしています。

■ビジョン実現タスクフォース　平成 30 年度の主な事業

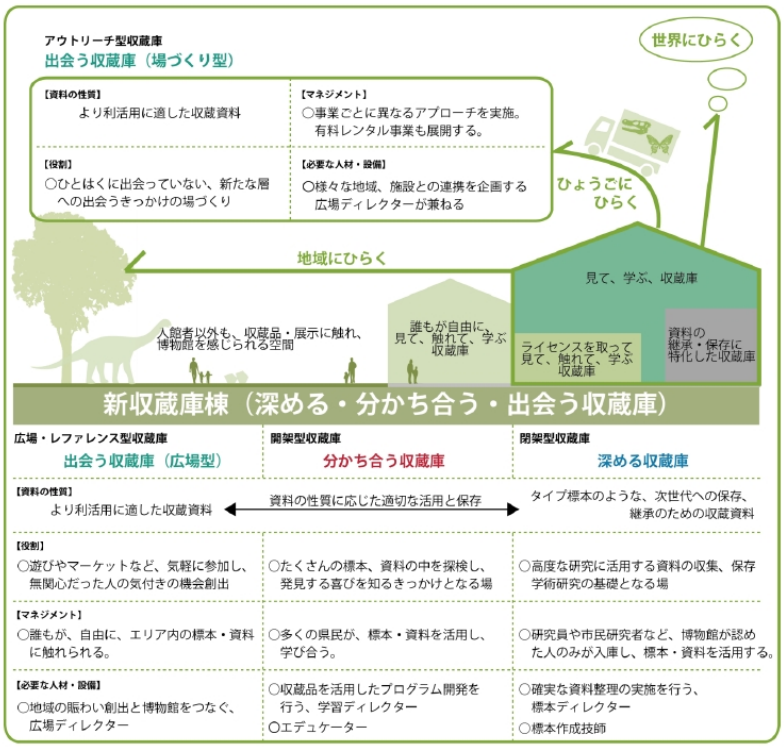
（1）新収蔵庫棟基本構想の策定

ひとはく将来ビジョンの実現の一方策として、標本・資料の収集、保管、活用を更に推進すべく、角野幸博委員長（関西学院大学）を中心とした策定委員会を設置した。4 回にわたる議論のもと、平成 30 年 8 月 31 日に『ひょうご五国の宝箱　新収蔵庫棟基本構想』の策定に至った。

・新収蔵庫棟のコンセプトを「新たな好奇心を発見する場所」とした。コンセプトを実現するための活動指針は「標本・資料の持つ価値を、すべての人とひらく。」とし、すべての人に開かれた博物館で、標本資料に「出会い」「分かち合い」「深める」ことによって、その価値の扉を開いてもらえるよう活動することを目指す。

・「出会う収蔵庫」、「分かち合う収蔵庫」、「深める収蔵庫」を計画し、標本資料を楽しむ屋外空間から、本物の標本資料を用いた体験プログラムができる屋内空間～保存と研究に特化した閉架型収蔵庫が有機的に連続することによって、来館者の様々な興味・関心に応えられる構成とした（下図参照）。

・「博物館のあるまち、フラワータウン」の再生を目指し、これまで培ってきた多様な人材とのネットワークと協働を通して、上記の構想を実現する。



（ビジョン実現タスクフォース 赤澤宏樹・三橋弘宗・高野温子・布野隆之・福本優）

■ 恐竜タスクフォース　平成 30 年度の主な事業

（1）篠山層群化石を活用した地域活性化を目指す人材育成システムの構築

篠山層群から産出する化石の調査・研究をさらに推進し、その成果を活用するため、人材育成（発掘・剖出・普及教育）の体制を強化する。今後 10 年間で持続可能な人材育成循環システムの構築をめざす。最終的には、ボランティア人材の登録 100 名体制を目標に、将来的に持続可能な人材育成システムの基盤をつくる。その基盤づくりに向けて、以下の事業を実施した。

１－１．人材育成システムの構築に向けた基盤づくり

「ひとはく化石専門指導員」の認定制度を設け、人材育成に取り組んでいる。また、平成 30 年１月より「化石剖出ボランティア」の受け入れを開始した。認定した化石専門指導員は５名、剖出ボランティア登録は 14 名（H.31.3 月現在）。

１－２．市民参加型発掘調査

ひとはく化石専門指導員を認定するための実地研修として、川代トンネル岩砕（篠山層群）を用いた石割ボランティア調査を実施した。2017 年 10 月からこれまでに行われた川代１号トンネル岩砕石割調査の参加者はのべ 330 名。石割ボランティアの登録者数は 37 名（H.31.3 月現在）

（2）研究

丹波竜に代表される篠山層群産の脊椎動物化石の研究を中心に、国内外の大学・研究機関等と協働して推進し、将来の研究拠点形成を視野に、研究実績の蓄積や地域づくり活動支援の強化を進める。

・研究発表 2 件（兵庫県立大学　知の交流シンポジウム 2018、米国古脊椎動物学会）。
・記者発表 1 件「篠山層群の恐竜・鳥類卵化石発掘調査の実施について」（平成 30 年 11 月）
・卵化石発掘調査

平成 27 年 10 月に、丹波市山南町・上久下地域自治協議会の主催で実施した試掘調査において、丹波竜発掘現場近くから、非常に小型の卵化石（卵の形状を留めた化石）が密集した状態で複数発見された。化石の形状や微細構造の特徴から、鳥類にきわめて近い系統の獣脚類恐竜、もしくは初期の鳥類と考えられる。このような化石の発見は、国内では他に例がなく、世界的にも極めて稀であり、恐竜類・鳥類の営巣行動の進化を解明する上で、貴重な物である。本調査では、試掘時に発見され現地保存された卵化石の密集体を採集するとともに、その周辺エリアをボランティアとの協働で調査し、新たな恐竜等の化石資料の発見に努めた。

〇調査概要

(1) 工事期間：2018年12月～2019年3月末
　　調査期間：2019年1月8日（火）～3月9日（土）
(2) 場所：兵庫県丹波市山南町上滝　丹波竜発見現場の上流側
(3) 調査範囲：約21m^2
(4) 調査体制：人博研究員、恐竜化石総合ディレクター、共同研究者、発掘ボランティア
(5) 研究協力者：筑波大学生命環境系　田中康平氏
(6) ボランティア：登録者数60名　延べ参加人数約434名

（3）普及事業

恐竜化石等の調査や研究内容をセミナーの開催や展示等を通じて広く公開する。

３－１．県政 150 周年記念国際シンポジウムの開催

12 月 8 日（土）に、「巨大恐竜、竜脚類の謎に迫る！」と題して国際シンポジウムを開催した。西上三鶴兵庫県教育長の開会挨拶に続き、アルゼンチンのコマウエ国立大学のホルヘ・オルランド・カルヴォ教授、ロシア科学アカデミーのアレクサンダー・オレゴヴィッチ・アヴェリアノフ教授による講演が行われた。その後、岡山理科大学の石垣忍教授、福井県立恐竜博物館の関谷透研究員の講演に続き、当館の三枝春生主任研究員が講演した。さらに、演者全員をパネリストとして、当館の池田忠広主任研究員がコーディネーターを務めたパネルディスカッション及び質疑応答が行われた。最後に、中瀬勲館長が閉会挨拶、シンポジウムは盛会のうちに幕を下ろした。参加者数 265 名。

３－２．展示
・緊急速報展「篠山層群から見つかった小さな植物化石」（4/27-7/1）
・展示協力 3 件（国営明石海峡公園、多賀町立博物館、ミュージアムパーク茨城県自然博物館）

（4）地域支援
平成 22 年度に締結した「篠山層群における恐竜・ほ乳類化石等に関する基本協定」にもとづき、地域支援を展開している。平成 27 年度から丹波県民局が主導する「丹波地域恐竜化石フィールドミュージアム」事業が始動し、その活動を支援している。

４－１．丹波竜フェスタの開催（協力）
丹波市と協力し、丹波竜フェスタの一般向け講演会「日本の若き古生物学者」（12/2）を開催した。参加者数 250 人（フェスタ来場者数 2、600 人）。

４－２．各種事業への参画
・恐竜化石関係機関等連携推進会議（事務局：丹波県民局）　１回（9/10）
・丹波地域恐竜化石フィールドミュージアム推進協議会・総会（5/25）
・丹波地域恐竜化石フィールドミュージアム会議　8 回（8/16、 9/27、 10/26、 11/29、 12/19、 1/16、 2/21、3/20）
・丹波市恐竜を活かしたまちづくり協議会（1/15）
・丹波竜公式ホームページリニューアル業務評価委員会（5/28、 7/6）
・企画展示　2 件（丹波竜化石工房ちーたんの館）

（恐竜タスクフォース 佐藤裕司・太田英利・三枝春生・池田忠広・加藤茂弘・半田久美子・久保田克博・生野賢司・田中公教）

■地域連携タスクフォース　平成 30 年度の主な事業

（1）他施設との連携によるジーンバンク活動の充実
ジーンバンク活動の充実を図るため、姫路市立植物園、新宿御苑などの視察・ヒアリングを実施し、連携の可能性やその内容・方法について検討した。今後は、種子や育成株の提供や受け入れなど継続的な連携・情報交換、信頼関係を構築する。また、兵庫県産野生植物（絶滅危惧種）の種子の積極的受け入れ・保全・一部栽培に取り組む他、セミナーや展示を通じて、ジーンバンク活動の見える化を図る。

（2）恐竜化石産出地域における生涯学習プログラムの開発と体制の構築
丹波市や篠山市など恐竜化石産出地域において、地域の担当者ヒアリング、現状のプログラム視察、ワークショップ参加者の希望などから、課題を整理し、地域の担当者が継続して運営可能な生涯学習プログラムを開発し、その運用の体制を検討した。具体的には、新たな恐竜のジオラマを企画・製作し、各種研修会や新たなワークショップを試験的に実施している。

（3）ひとはくのシンクタンク機能の見える化
ひとはくのシンクタンク機能として、兵庫県や県内の自治体における、環境分野、まちづくり分野などの委員会等への参画、様々なプロジェクトを通じて行政や施設、市民グループ等を支援している。これらのシンクタンク機能を見える化するため、参画している委員会の量を明らかにし、内容を類型化し、図表としてまとめた。また、様々なプロジェクトについては、支援対象や内容などを類型化した他、特に総合的な公共施設支援について、ひとはくの担当者にヒアリングし、資金、支援内容、支援の意義や目的、今後の課題や展開を明らかにし、分析を行った。この成果は、「博物館におけるシンクタンク機能の特徴としくみに関する研究～兵庫県立人と自然の博物館を事例として～」としてまとめ、日本ミュージアム・マネジメント学会研究紀要にタスクメンバー連名で投稿した。

（地域連携タスクフォース　藤本真里・黒田有寿茂・大平和弘・久保田克博）

プロジェクト

ひとはくでは、2002 年度の「新展開」以後、館長辞令による館独自の職制を導入し、研究員が事業部やタスクフォースを兼務する体制で事業を推進してきました。さらに 2012 年度に「ひとはく将来ビジョン」をとりまとめ、組織体制・マネジメントのあり方の一つとして、「適時チームビルディングを行う柔軟な組織体制」を掲げました。変化の激しい社会情勢に柔軟に対応するため、課題やミッションに合わせ、チームづくりや事業等のリストラクチャリングをフレキシブルに行うことができる仕組みが必要であり、2014 年度より、「プロジェクト制」の導入を開始しました。これは、研究員になじみのある研究プロジェクトの方法を、事業等にも適用したもので、各研究員が自由に新規に立ち上げることができます。構成員は代表者、分担者、協力者で、ひとはくの職員に限らず、外部と協力して行うことができます。また外部資金の導入も積極的に進めています。ひとはくの活動を網羅する内容になっており、国際交流事業やシンクタンク、生涯学習プログラム、収蔵資料、学術研究など多岐にわたっています。ひとはくでは独自に中期目標を設定し定量的な指標を用いて評価を行っていますが、プロジェクトでは、定量的に把握できない質的なパフォーマンスを表しています。2018 年度は、下記 88 件のプロジェクトを展開しています。

■2018 年度のプロジェクト（計 88 件）

文科省博物館ネットワークにおけるレガシー事業	2019 年京都で開催される ICOM に向け、全国規模での自然史博物館ネットワークの構築をめざし、①国内外の視察をもとに、魅せる収蔵庫関連の事例集作成、②京都町屋での文化財を活かした収蔵展示、③カタツムリ展の巡回を行う。自然史資料への理解を深め、収蔵庫増設の機運を高めることを目的とする。また、同時に、課題解決が滞り、違法状態にある頌栄短大標本問題や、館内のおける収蔵庫増築や展示室の更新について併せて関係者と検討し、実現可能な展示更新や館内改修案と体制についての提案書を作成する。
頌栄短期大学標本の登録・整理	2012 年に寄贈された当該コレクションは貴重な大コレクションであるが、生物系収容庫の収納可能な量をはるかに超えているため、ホロンピアホールのホワイエに保管されたままであり、閲覧希望に添えない状況が続いている。順次データ入力と収蔵庫への配架を進めているが、新館構想にあわせて収蔵庫を拡大整備し、博物館の植物コレクションと一体化し、閲覧の便宜をはかる。5 年間で 2 万件のデータ入力、配架を行う。
博物館国際交流事業の推進	フランスアベロン県ミクロポリス館やマレーシア国サバ大学熱帯保全研究所を初め、世界各国の博物館施設等の交流活動を推進し、海外博物館施設の先進事例等の収集に務める.
国際交流事業　高校生のための生き物体験ツアー in 台湾	台北市立動物園の全面協力のもと、台湾で高校生（日本人 20 名、台湾人 20 名）による生物調査を行い、成果を使った展示をひとはくで行う。
キッピー山プロジェクト	三田市有馬富士自然学習センタープログラム運営事業の実施。ひとはくの機能拡張、新規事業開発に資する試行を含む。
鳴門海峡の渦潮の世界遺産登録に向けた検討支援	鳴門海峡の渦潮の世界自然遺産登録に向けた学術的支援、および枠組みづくり、体制づくり等の支援をおこなう。
うずしお科学館運営支援	リニューアルオープンした南あわじ市大鳴門協記念館内のうずしお科学館の運営計画策定や運営体制、ネットワークづくり等の支援を行う。
但馬牛博物館運営支援	但馬牛博物館の改修・運営計画策定、運営・マネジメント計画・体制づくりに関する支援を行う。
ありまふじ休養ゾーン活性化プロジェクト	有馬富士公園風のミュージアムを活用したキャラバン事業の企画・実施。
幼児期の環境学習ネットワーク推進事業への支援	幼児期の環境学習を推進するため、園庭での自然体験プログラム開発に関する支援を行う。
ヒアリ・外来生物・危険生物プロジェクト	ヒアリ、クビアカツヤカミキリ、ツメガエルなどの特定外来生物、要注意外来生物に指定されている動物を中心として対応し、侵入の原理と影響を研究活動を通じて解明し、社会的背景と実現可能な対策を含めた研究を行う。これらの成果は、環境省をはじめ行政機関に提案し、社会実装することを目的とする。また、ホームページや展示、シンポジウム等を通じて、行政等と連携して人材育成や普及教育を行う。
博物館トイレ改修プロジェクト	施設の老朽化やインバウンド化に向けた社会情勢にともない、博物館本館、収蔵庫棟、ホロンピアホール、エントランスホールにおける全トイレ設備の改修を行う。
加東市との連携と環境学習事業への支援	協力協定にもとづく環境学習事業への支援、とくに「加東市ノーベル大賞」の審査と講評。その他、学校教育との連携による環境学習プログラム開発など。
２０１７年～２０１９年までの展示計画２　コレクション（収蔵）展示	新館建設あるいは改修・収蔵庫増築に向け、コレクション展示を年１回、夏秋季（７－１１月）に実施する。２０１６年に公募を行い、2017-19 年の案を決める。特に 2019 年は ICOM 開催年にあたり、海外からの来館者も予想される。

２０１７年～２０１９年までの展示計画１　トピックス展示	トピックス展示は年４回を目標とし、担当研究部を決めて実施する。担当研究部は、部内で担当者を決めて展示を行う。研究員以外に連携G、地域研究員も展示作成可とする（その場合は担当研究員が展示の質管理を行う）。
館内の壊れた箇所をチマチマ修理するプロジェクト	2012年度から館内の故障個所や施設維持の運用改善について直営にて修理対応してきた。そのことによる節約効果（省エネ）は、年間で約500万円以上になる。また頌栄短大標本による異臭対策では緊急措置を施し、緊急に化学物質の拡散対策に努めてきた。展示担当と連動して、館内の故障・問題個所について、連絡ボード上で情報共有し、ＦＳ、設備、清掃、警備と連携して問題解決に努める。館内サインの修理、展示の改修などについてオンデマンドで対応する。現展示担当の支援を兼ねる。
ひとはくのハチ類コレクション整備推進プロジェクト	ひとはくのハチ類コレクションはタイプ標本を含む日本・アジア各地の標本からなり、当館を特徴づけるコレクションになっている。さらに、2015年度には４万点におよぶ日本産カリバチ・アナバチ全種オス・メス標本の寄贈を受けた（羽田コレクション）。本プロジェクトでは、当館のハチ類コレクションの整備とさらなる充実・活用を推進する。また、公開可能な標本データについては、当館ＨＰやＧＢＩＦ等で公開していく。
Kidsサンデープロジェクト	月の第１日曜日に子ども向けあるいは家族向けのイベント等を行う「Kidsサンデー」を実施する（年間９回程度を予定）。また児童館、幼稚園、高齢者大学等と連携しながらプログラム開発を行う。
ミュージアムキッズ！プロジェクト	こどもひかりプロジェクトの支援と連携。全国のさまざまな分野のミュージアムとともに、幼児～低学年向けプログラムの開発提供、ユーススタッフ（大学生）の共同育成、ジャーナルの刊行等。
Kidsキャラバン	Kidsキャラバン等のアウトリーチ
共生のひろば	当館の将来ビジョンの根幹となる「創造と共生の舞台・兵庫で参画する皆さんが共演する生涯学習院」を具現化する当館が11年間継続してきた中核事業であり、昨年度は年間でもっとも多くの入館者数、参加者数を記録。ひとはく地域研究員やひとはく連携活動グループをはじめ、地域の自然・環境・文化を自ら学び伝える活動を行っている方々が、お互いの活動を知り、活動の質をあげ、新たな展開のヒントを得る場としての「共生のひろば」を継続する。
相生キャラバン	当館の将来ビジョンにある「美しい自然・環境を未来に継承する学習コアとしての博物館」と将来の高度な担い手育成を目的とし、相生市役所および博物館実習、兵庫県立大との協力のもとで、相生の地域資源に関する基礎調査、キャラバン事業、相生湾の里海環境を活かした環境学習プログラム、海辺の自然環境保全についての支援を行う。この実施にあたって、標本やはく製作成費用、アルバイト・旅費、各種消耗品として執行する。作成した標本やパネルは、ふるさとミュージアム等のキャラバン事業に利用可能。
中山間地域の学校における地域資源開発・人材育成型の学習教育プログラムづくり	一過性での学校訪問ではなく、地域の人材育成や学校の社会関係資本形成といった能力構築を行う。いくつかの学校、とくにへき地校では、学校周辺の地域資源の再発見とその活用を通じた人材育成ならび、標本作成や観察の方法、環境改善の方法について講義し、地域で情報発信できる人材育成を目指す。また、その内容を教職員セミナー等を通じて還元する。このテーマはすでに昨年度から実践しており、当館の将来ビジョンにおける中核課題に合致している。
博物館研究紀要「人と自然 Humans and Nature」の編集・発行	博物館紀要の原稿募集・審査・編集・発行（印刷は行わず、電子媒体のみとする）
兵庫県下市町の生物多様性地域戦略の策定・推進を目的とした行政支援	年１回程度の市町の生物多様性施策担当者を対象とした情報交換会を開催し、生物多様性施策担当者が博物館や近隣市町への相談や事例把握をしやすい環境と整え、そのことによって、地域戦略策定・推進に貢献する。また生物多様性地域戦略を策定した市町に対して委員等を派遣して、戦略推進に対するアドバイスを行う。またこれから戦略を策定しようとする市町の相談を積極的に行うとともに、戦略の策定の必要性を働きかける。
棚倉町里山再生・活用プロジェクト	福島県棚倉町で里山の保全・活用に向けた各種の取組を行う。
ジーンバンク事業の推進	生物多様性保全を目的として、絶滅危惧植物等の危険回避、緊急避難、系統保存、増殖および種子保存を行う。また､生物多様性に配慮した植生・生態系の創出を目的として､地域性種苗を用いた公共用地・企業用地等における緑地形成支援を行う。また、これらジーンバンク事業の実現に必要な調査・研究、技術開発を進めるほか、ジーンファーム見学会等の実施を通じ環境学習・生涯学習支援を行う。
博物館情報システムの開発とシステム整備	情報システム更新によって整備されたシステムの円滑な運用を図るために、館内各課との調整を図り、より扱いやすいシステムの整備開発、保守につとめる。主には、ＨＰの改訂、セミナー受講者システム、館内展示端末（４Ｆ）、館報データ等の集計、名簿管理について、従来ルールを引き継ぐ形で簡便化と自動化を図る。これまで整備した情報システムに関する講習会の開催、視察対応、館員からの各種質問対応、ホームページの構成、また、次期システム更新時の効果的な整備手法の開発や入館者やセミナー受講者等の既存情報を活用したマーケティング分析資料の作成を行う。
地学系収蔵庫の資料整理の推進	地学系収蔵庫の収蔵資料について、資料整理とデータベースの構築を推進し、コレクションの管理と利活用促進を行う。
琉球列島を中心とした熱帯～温帯アジアの爬虫・両生類相の多様性と自然史に関する研究	琉球列島を中心に熱帯アジアから日本本土にかけての爬虫両生類相の多様性・固有性・自然史をテーマに、その現状の把握、そして背景となる地史・環境履歴の解明を目指す。
ブータンの爬虫・両生類の多様性に関する調査研究	昨年に引き続き、長きにわたる鎖国政策の影響で知見の少ないブータン王国の爬虫・両生類層に関する調査研究を進める。

生物多様性創出機構の解明	アリ擬態現象が鋳型となって創出されるアリ擬態クモ類の種多様性の調査研究を行い、生物間関係が織りなす生物多様性創出維持機構を解明する。
管住生ハチ類を指標とする里山環境の保全研究	里地里山を生息環境とするハチ類の多様性や生態の調査研究を行い、里山環境保全に貢献する。
昆虫標本の展示手法の研究	昆虫標本を展示活用する際に、多くの来館者に自然・生物の美しさを効果的に魅せる工夫の開発研究を行い、昆虫学や標本の重要性をより良く伝える手法の確立を目指す。
シソ科アキギリ属の送粉者調査と繁殖干渉	日本産アキギリ属を例に、近縁種間でどの程度の繁殖干渉が起こっているかどうかを明らかにする。
兵庫県産植物を中心とした植物分類学的研究	博物館活動の基盤となる資料収集の強化、及び県産の絶滅危惧種、希少種を対象とした繁殖様式、フェノロジー、系統解析等、保全に資する基礎生物学的研究を実施する。
兵庫の絶滅危惧種オチフジの集団解析	オチフジは絶滅危惧Ⅱ類の希少植物である。日本固有と考えられてきたが、最近中国からオチフジが見つかったという論文が出版された。本当に日本と中国のオチフジは同種で良いのか、形態解析・遺伝解析と系統解析等でアプローチする。
アマナの遺伝解析	日本と中国に分布が知られるアマナと同属ヒロハノアマナについて、その種分化の過程を系統解析により明らかにする。
植物標本デジタル化の促進	植物標本のデータ入力作業の省力化効率化を目指し、標本画像の取り込み、画像からラベルデータの自動抽出およびデータベース入力の自動化を目指す。
渓流沿い植物ヒメタムラソウの繁殖様式	ヒメタムラソウはシソ科アキギリ属唯一の渓流沿い植物である。昨年度の西表島の調査により、本種がシソ科で前例がない雌性先熟の繁殖様式をもつ可能性がでてきた。充分なデータをあつめて、速やかな発表を目指す。
ネパール植物誌への貢献	ネパール産ショウガ科植物標本の同定と記載を行う
生物系標本庫（昆虫）の資料整理とデータの公開	生物系収蔵庫における昆虫標本の管理と利活用の促進をはかり、未収集コレクションの取得と整備につとめる。これらの資料をデータベース化して、公開可能な標本データについては、当館ＨＰやＧＢＩＦ等で公開していく。
東南アジアにおける吸血節足動物媒介性ウイルスの網羅的探索とリスクマップ作製	2015 年度まではフィリピンにおける調査を担当した。2016 年度はマレー半島における調査を担当する。
豊岡市におけるマダニ調査	2015 年度までの調査で豊岡市の SFTS 患者発生地におけるマダニ相と季節消長を明らかにした。2016 年度は、これまでの結果をふまえてマダニ類の殺虫剤試験などを実施する。
岡山市における蚊類調査	2015 年度の調査で岡山市の後楽園等における蚊成虫と幼虫の調査を実施し、分布状況を把握した。2016 年度は、デング熱とジカ熱を媒介する恐れのあるヒトスジシマカの移動分散について調査する予定である。
愛媛県中～南部におけるマダニ調査	我が国でも特に SFTS 患者が多く発生している愛媛県中～南部におけるマダニ相調査を実施する。
日本産ウオノエ科甲殻類の分類学的研究	日本産ウオノエ科甲殻類の標本を整理し、未記載種と未記録種の記載を進める。また、これまでの知見を整理し、ウオノエ類と宿主魚類との対応関係を整理する。
貝殻に住む矮小シクリッドが並行進化した遺伝機構の解明	タンガニイカ湖における潜水調査・資料採集、および日本での分子解析を行うことにより、シクリッドの Telmatochromis temporalis 矮小型が並行進化した遺伝機構を解明する。
博物館ネットワークを通じた生物多様性情報の活用と標本整備	液浸収蔵庫における液浸標本および生物系収蔵庫における昆虫、鳥類、哺乳類等の乾燥標本の管理と利活用の促進をはかり、未収集コレクションの取得と整備につとめる。これらの資料をデータベース化して、当館ＨＰやＧＢＩＦ等にデータ公開する。
神戸市排水処理施設浸出水における自然浄化システムの構築	神戸市北区に位置する長尾山排水処理場における浸出水について人工水路および湿地を用いた水質浄化システムを構築し、その評価と将来の運営計画についてとりまとめる。
御影高校における博物館活用型の学習プログラム構築	県立御影高校の環境科学部および総合学習の授業を通じて、六甲山のキノコに関する基礎研究を行い、その成果をもとに当館での展示会やキャラバン（御影クラッセ、森林植物園等）を開催する。また、総合学習では、近隣を流れる石屋川に生息するプラナリアを活用した教育プログラム開発を行う。
芦屋市打出浜小学校における干潟を活用した学習プログラムの開発	2 年前より、芦屋市打出浜小学校に隣接する干潟を活用した環境学習を行っている。年４回の講義を行い、うち１回は博物館に団体来館していただく。芦屋市の地元で活動されている方や市役所等との連携をはかり、将来的に地域研究員や教員でプログラムを実施できるように能力構築する。
「ドリームスタジオ・フェスタ」プロジェクト	NPO 法人人と自然の会が主催する「ドリームスタジオ・スペシャル」の開催を支援する。本事業は、集客を目的とする大型イベントではない。自然環境や標本を活用した参加型プログラムを提供することにより、来館者の好奇心を育むと共に、博物館に対する満足度の向上を図ることを目的とする。開催時間は 2 時間。来館者は 500 人以上。来館者全員が 1 つ以上のプログラムに参加できるよう準備を進める。
有馬富士公園　人材育成	有馬富士公園をフィールドにした地域づくり支援や人材育成プログラムの実施。
ミツカンよかわビオトープ倶楽部支援	ミツカンよかわビオトープ倶楽部によるビオトープを活用した事業支援（ビオトープに関わる啓発・人づくり等）。
尼崎 21 世紀の森構想の推進支援	兵庫県の重要施策の一つである尼崎 21 世紀の森構想の推進に向けて、新たな 10 年のキックオフから人材養成、制度設計に至る推進支援を包括的に行う。
西武庫公園再生支援	兵庫県から尼崎市に移管され、尼崎市緑の基本計画においてリーディングプロジェクトに位置づけられた西武庫公園において、地域住民によるネットワークの運営支援を行う。
三田市地域計画策定支援	三田市内のまちづくり協議会にて地域計画を策定するための、行政支援および地域団体支援を行う。

兵庫県下の提供公園の実態把握と改善	自治体の大きな負担となっている提供公園について、兵庫県下の自治体における実態を把握し、改善方策を提案する。
官民市民協働型の街路樹管理の提案	街路樹の官民市民協働型の管理に向けて、現状把握から各種主体の意向、街路樹の状況を把握し、改善方策を提案する。
古写真を中心とした環境系資料活用による地域支援	古写真による地域の原風景の抽出や地域マネジメントへの活用方策、収蔵資料展での展示公開やセミナー等への活用方策検討のほか、館内外における実践を通し、活用プログラムの開発を行う。
地域資源を活かした「明延」のまちづくり支援	旧鉱山の地域資源が残る小規模集落である養父市大屋町明延区において、市や市民団体と連携しながら、まちづくりの場づくり支援や新たなステークホルダー育成、文化的景観の保全・活用等についての提案や実践を行う。
近畿・中国・四国のランドスケープ遺産インベントリーの作成	ランドスケープ遺産（次世代に残したい風景や優れた造園空間）の保全と継承を図ることを目的に、日本造園学会連携のもと、それらの記録収集・登録作業を進める。また、兵庫県版レッドリストの自然景観として公表するなど、県下の景観の学術的価値の顕在化に寄与するとともに、館の資料収集・公開活用にも大いに貢献する。
パークマネジメントの社会実装に向けた行政支援	有馬富士公園でのマネジメントの運用、企画等の支援、芦屋市「宮塚公園」、吹田市「千里南公園」でのパークマネジメント組織立ち上げ支援など具体的取組や、公園・パークマネジメント等に関する連続セミナーによる行政、民間との情報交換の場の運営を通じて、様々な規模でのパークマネジメントの社会実装に向けた行政の取組を支援する。
「そとはく」による、持続性のあるニュータウン再生への取組	博物館周辺の屋外空間を活用する「そとはく」での活動と国内外ニュータウンの再生に関わる研究を通じて、フラワータウンを博物館のある持続性のある街としての再生に貢献する。
北摂里山博物館構想の支援	「北摂里山博物館構想」の推進に向けた各種取組を支援し、北摂地域の生物多様性保全と地域振興を図る。具体的には、植物・植生の保全・管理手法の開発・普及、自治体への政策提言、自治体や市民団体、企業などの活動支援、児童生徒や地域住民の環境学習支援、生物多様性保全の担い手の育成などを行う。
三田市皿池湿原の保全	三田市の皿池湿原は兵庫県版レッドデータブックのＡランクに指定されている。しかし、この湿原では様々な問題（遷移の進行に伴うヌマガヤ群落や木本群落の拡大、周辺部に広がる放置里山林の照葉樹林化など）が発生しており、今後の生物多様性の減少が懸念されている。三田市と連携してこの湿原の保全を図る。
たつの市鶏籠山の照葉樹林の保全	たつの市鶏籠山の照葉樹林は兵庫県版レッドデータブックのＢランクに指定されている。しかし、鶏籠山はシカの生息密度が非常に高く、シカの食害による照葉樹林の衰退が大きな問題となっている。林野庁と連携してこの樹林の保全を図る。
兵庫県における未確認植物群落の実態把握	兵庫県にはまだ調査がほとんど行われていない植物群落が数多く存在する。また、里山の管理放棄やシカの増加などに伴って、過去に例のない新たな群落が各地でみられるようになってきた。このような未確認群落の実態を把握するための調査を実施し、その成果を随時論文にまとめて公表する。
都市公園と里山林の植物相の保全と活用	都市公園と里山林の植物相を明らかにし、貴重種の保全および自然観察に有用な植物の活用やガイドの作成を行う
丹波地域の貴重植物の探索と保全活動	丹波地域の貴重種を探索し、保護が必要な場合は保全策を講じ、一般公開などにより地域の魅力を村おこしにつなげる。
乾燥種子標本の収集・活用	開館当初から収集・保管してきた乾燥種子標本を今後も適切に保管すると共に、展示やセミナー、キャラバン事業などでの標本の活用を図る。また、収集活動の継続や寄贈の促進、他館との標本交換などを行うことで標本のさらなる充実化を図る。
植生資料データベースの構築・公開	神戸大学発達科学部植生研究室(武田義明教授）や杉田氏より寄贈された 1960 年代以降に調査された国内各地の植生調査資料をデジタル化、データベース化し過去の植生の変遷や地域の植生の特徴を理解するための基礎資料として活用する。 WEB 上での公開も検討し、広く研究者、専門家が利用できるデータベースをめざす。
植物・植生映像資料データーベースの充実化と有効活用	開館当初より収集し、データベース化している植物・植生映像資料を適正の保管するとともに、映像資料の寄贈の受入や館員による収集映像の追加によりデータベースを充実化し、撮影過去の植生の変遷や地域の植生の特徴を理解するための基礎資料として活用する。 WEB 上での公開も検討し研究者、専門家だけでなく広く県民も利用できるデータベースをめざす。
ひとはく生物多様性の森を活用した市民活動・環境学習支援	深田公園の当館管理区域に位置する残存林および人工林で現在行っている里山管理および施設管理を継続し、兵庫方式の里山管理の見本林として整備する。また里山の代表的な植物を観察できる場所に整備する。 安全管理上の問題もあるため、完全一般公開とはせず、里山活動を行う市民団体や行政、企業向けのセミナーや学校団体等の環境体験学習等で活用する。
三田市南公園　まちなか里山保全プロジェクトの支援	三田市が策定した南公園の里山公園管理計画である「まちなか里山基本方針」の実現を支援するための、人材育成プログラムに対する講師派遣やコンテンツ提供、育成された人材で結成される活動団体への支援を行う。また整備された南公園を活用して、ひとはく独自の環境学習プログラムの実施（主に特注セミナー）を検討する。
東お多福山草原保全・再生プロジェクトの推進	東お多福山草原保全・再生研究会が進める、草原保全・活用事業を支援する。 また草原保全に関する研究成果を得る。 東お多福山草原生物多様性ガイドの養成を進める。 協力者との連携を密にすることで、六甲山に関わる行政への支援のパイプを確保する。
生物多様性協働フォーラムの枠組みを活用した生物多様性の普及・啓発、研究開発	平成 23 年度より実施している生物多様性協働フォーラムの枠組みを活用して、生物多様性の主流化に資する研究会開発を行うとともに、研究成果の公表、普及啓発活動を展開する。

播磨灘沿岸における塩湿地植物・塩湿地植生の保全推進	播磨灘沿岸に生育する塩湿地植物の保全に向け、野外調査、発芽試験､栽培試験等を行う。データは学会・論文での発表のほかセミナーや展示で活用する。
名勝慶野松原における海浜植物・林床植生の保全推進	慶野松原（南あわじ市）の生物多様性保全に向け海浜植物の生態や林床植生の組成・構造を調べる。
兵庫県における重要植物群落の現状把握と保全推進	兵庫県内の重要植物群落の現状を把握し、環境施策や森林整備事業の企画立案に必要な基礎資料の充実を図る。収集した植生写真や植生調査資料はセミナーや展示で活用する。
生物系標本庫（植物）の資料整理とデータの公開	生物系収蔵庫における植物標本の管理と利活用の促進をはかり、未収集コレクションの取得と整備につとめる。これらの資料をデータベース化して、公開可能な標本データについては、当館ＨＰやＧＢＩＦ等で公開していく。
高次脳機能障がい者にもわかりやすい放送音声の視聴実験	開発した DAISY 形式を中心に失語症者など高次脳機能障がい者に〈視聴〉していただく。
アフリカ中央部（カメルーン、コンゴ共和国など）の既存収集品の整理	すでに個人的に科研費その他の外部資金で収集した霊長類学・自然人類学に関わる哺乳類（骨格、皮）、植物（さく葉標本、果実の乾燥標本）、その他の資料をを収蔵可能なように整理し、順次、収蔵する。
インドネシア・パンガンダラン自然保護区のシルバールトン長期データの解析	辻 大和さん、Erri Megantara さん、Bambang Suryobroto さんたちが中心となって現地調査を行い、20 年程度の長期調査を取りまとめる。三谷と渡邊邦夫さんは研究のアドバイスを行う。
言語音がわかりにくい高次脳機能障がい者とともに作る生涯学習施設の放送音声	高次脳機能障がい者の協力のもと、災害情報や緊急避難情報など放送に適した〈絵・文字・音声〉を探り、実用化を目指す。
「深田公園植物情報」展示等による演示プログラムの試行	４階ひとはくサロンから見える範囲での植物を観察する場所やポイントなどの情報を１～２ケ月ごとに「深田公園植物情報」として内容を更新する（専用展示台によって、ひとはくサロンで展示）。また、深田公園を使って植物を対象とした演示プログラムを試行する。
年配者と地域の子どもをつなぐプロジェクト	年配者と一緒に、地域の小学校や児童館などへ行って自然、環境や生きものについてのプログラムを実施しながら、年配者と地域の子どもたちがコミュニケーションする仕組みを検討する。